

A 4 7 / 2 4

地域参加を通しての環境学習のあり方

— 持続可能な社会を目指す地域と高校生との共生 —

竹内久代 (エクセラン高等学校)

1 はじめに

(1) 本校で環境教育を行う背景<教育環境の素地>

本校の前身は松本昭和園芸高校で、10年前美術科と福祉科が加わり「エクセラン高校」となった。現在でも全校生徒が園芸活動に関わり、環境・土などと深い関わりを持っている。園芸は勿論、各各コースの特徴を生かした公開講座や生徒会活動や鉢花の販売活動を通し、地域との交流を実践してきた。

また本校では不登校経験者や軽度発達障害生を積極的に受け入れ、コース制や習熟度別授業、授業内容や体制などを工夫して自然な形でのインクルージョン教育を行ってきた。これらの生徒にとって地域に出てコミュニケーションをとることは苦痛でもあるが、自然や地域の持つ教育力は大きいと考えられる。

(2) 社会情勢と環境園芸コース授業での環境学習の方向性

近年環境問題が大きな社会問題となっており、個人々々でできることを考え実践することが重要になっている。環境園芸コースの授業では生態系や環境問題を学習するが、教科書での学習だけでは表面的で他人ごとの理解で終わることに危機感を感じ、3年前から新聞を活用したり、地域の環境を調べたり、各地の環境フェアに参加し始めた。環境問題を自然科学的・社会科学的両面からの接近による授業を組むことが必要であり、そこには地域の教育力が大きな意味を持つと思われる。

2 環境教育の歴史的流れ

(1) 環境教育の概念

環境教育とは、1970年、アメリカで「環境教育法」が立法化されたのを契機に世界的に注目され始めた概念で、1975年に発表されたベオグラード憲章では、環境教育の目的を次のように定義している。

環境とそれに関連する諸問題に気づき、関心を持つと共に、現在の問題解決と新しい問題の未然防止にむけて、個人および集団で活動するための知識、技能、態度、意欲、実行力を身につけた人々を、世界中で実行育成すること

(2) 日本の環境教育の歴史

日本の環境教育の流れの出発点は自然（保護）教育と公害（対策）教育にあると考えられる。

1つは戦後の高度経済成長で急速に進む自然破壊に対して、1970年代に自然保護教育のプロセスとして、「自然に親しみ、自然を学び理解し、自然を守るという階程を意識した教育」が始まった。環境破壊の現状に対し「自然保護＝自然を守る」という価値観が優先される教育であった。一方、1960～70年代に激化する公害問題に取り組む公害教育が各地で実施された。産業型公害の鎮静化とともに、環境教育の中でも湖や河川の汚染問題、エネルギー、ゴミ、リサイクルへの取り組みなどの公害対策教育の色彩が残る流れになっている。

これら環境教育は、総合的学習の中心的な教育内容として<自然体験型教育>として定着していくが、1992年地球サミットで提案された「アジェンダ21」の「持続可能な社会実現のための教育」の浸透はまだ遅

れていると感じる。「環境教育を理科の教師が行うことに限界があるのでは？」という声がささやかれ、生態系や自然に「親しみ理解すること」と「自分で動き始める」ことの溝が埋まってこなかった。環境問題を自然環境だけでとらえるのではなく、社会環境全体の中で捉える上で、「地域との連携」は不可欠である。

3 本校の生徒の実態と環境教育の関連性（従来の地域連携を踏まえながら）

（1）本校生徒にとっての環境学習

今日社会情勢の必要性から環境教育に取り組む主体は学校・行政・企業・NPO・自然学校などに多面化してきた。本校で取り組もうと考える環境学習の概念はあくまでもベオグラード憲章のとおりであるが、先述したような本校生徒の特性を踏まえ、環境学習の「環境」を今日的な社会的必然性からの「環境」として以上に人間性育成のための学習素材としての「環境」に重点を置いて考えていきたい。

（2）過去の積み上げ

	昔の発想での 地域貢献活動	公開講座 生徒会活動	学習教材としての 環境調査	環境啓蒙活動
建学精神 から最近	花栽培→地元販売 花種子栽培→ 地域への配布 クリーン大作戦	公開講座 清掃への取組		
H19年度	↓	↓	学校近辺の自然調べ	
H20年度	↓ 公開講座での生徒の 主役化	↓	・松本市の街路樹調査 + 調査結果の公開 ・廃油利用などの活動	・地元での環境フェア への参加 ・キャンドルナイト
H21年度	↓ 公開講座での生徒の 主役化	↓ + 出張講座	・松本市あがたの森公園 調査 ・総合的学習での環境学 習への取り組み・ ・廃油利用などの活動	・環境フェアへの参加 ・地球温暖化防止キャ ンペーン校登録 ・キャンドルナイト

（3）従来の地域交流における課題と不足点（生徒の姿から）

- ・トップダウン、活動へ補助的存在（やらされている、動かされている）としての生徒の姿からの脱却
- ・無意識からの脱却
- ・地域との連携＝貢献（やってあげている）という発想からの脱却→学ばせてもらっているという意識

4 今年度の地域参加による環境活動

- （1）対象生徒：普通科環境園芸コース3年 15名 環境園芸コース2年 14名
- （2）対象教科：2年＝環境科学基礎・化学 3年＝生物演習・植物バイオテク その他＊休日・放課後
- （3）今年の活動の特徴：地域の河川自然調査を通して、地域の保全活動を知り参加する＋啓蒙活動
- （4）年間実施内容
 - ① 自ら地域を知る活動の充実→地域の課題を見出し、自分たちに何ができるかを探す。
 - ② もらう話（企画）への乗っかり型啓蒙活動参加 → +自ら課題を探して活動を広げる。

	地域調査活動・地域保全活動 ・地域の自然や環境問題を知る ・地域の人と駆除活動などを行う	地域での環境啓蒙活動・参加	校内連携
4月	今年度の調査対象地把握 今年度の調査計画をたてる	今年度の活動計画・連携模索 (公民館・市役所・保育園・小学校・NPO)	
5月	薄川の生き物調査(月2回継続) 水質調査・利用調査	山の子保育園交流①	
6月	↓	公開講座	
7月	↓アレチウリ除去活動参加	(文化祭体験ブース)	
8月	↓	信州環境フェアへの参加	
9月	↓	山の子保育園交流②	
10月	↓	松本市消費生活展への参加 あずみ野環境フェアへの参加 山辺小学校環境ワクワククラブ	
11月	アレチウリ除去 クリーン大作戦	(全国環境学習研究会参加) (公開講座)	
12月	クズ蔓を使ってのリース作り	キャンドルナイト冬至への参加 (廃油ロウソクとクズ蔓リース配布)	
1月	調査結果のまとめ	(公開講座)	<携帯電話>を 通しての教科横 断授業実施
2月	*学習発表会(地域への開放) *公民館活動とのコラボ	外部講師との交流 地域NPOとの交流→来年度に	

(5) 実証の観点

本校の生徒にとっての「地域に参加することでの環境学習の意味」を今回次のように設定した。

- ① 生徒にとって環境問題が他人ごとから自分の問題として考えられるようになったかどうか。
- ② 生徒が地域の自然や地域社会について興味関心をもって、問題点を見出したかどうか。
- ③ 環境問題に対して、<自分にできること>を発見できたかどうか。

地域の環境活動にとっての意味は、次のような点を設定した。

- ① 地域の自然や問題や活動している人を知れたか。
- ② 本校での活動を知ってもらえたかどうか。

5 活動の教育的効果と課題

(1) 教育的効果

<学習発表会(テーマ:薄川の生き物から生物多様性を考える)後の生徒の発言から>

「今まで地球温暖化や酸性雨、貴重な生物が減少したり逆に外来種が増えているなどの問題は、遠い世界で起こっている問題だと思っていたが、身近に問題があることに驚き、自分も何かしなければと思った」「地域の環境フェアに出かけて交流しながら、励まされ褒められ、認めてもらいながら、自分たちが取り組んでいるささやかな環境対策や環境調査が思っている以上に大切なものであることに気がついて、自信がもてた」「自分が小さかった頃より環境がおかしくなっているので、自分たちより小さな世代にも伝えていかないといけない」「地域の何気ない自然(河川)にも外来種問題があり、反面準絶滅危惧種がいる大切な自然であることを知ってびっくりした。外来種は駆除活動を続け、きれいな水は守ってきたい」

<生徒の姿から>

生徒 A の変化：入学当初、厳しい緘黙で、頷くなどの意思表示が中心だった生徒→保育園での交流では1番の人気者に。環境活動の発表者として堂々と自分の活動を発表し、保護者も成長した姿を認めている。

生徒 B の変化：中学時代、不登校生。「自分はもっといい学校に入学できたはず」という思いが強く、正解のある教科学習が大切だという価値観を持っていた。地域の方が生徒の調査や活動を認めてくれる過程で自分のやっている学習の価値に気付き始め、調査や地域活動にリーダーとしての能力を発揮し始めた。

生徒 C の変化：自分の進路を理科系としていたが、環境問題の原因を作っているのも人間、被害を受けるのも人間、解決に向けて考えあうことも人間ということに気づき、一方環境保全活動も経済的視点が必要であると気がついて、経済系の大学で環境問題を考える進路を選択した。

生徒多数の変化：授業や学習で指示待ちの姿が多かったが、積極的に休日や放課後の活動に参加する生徒が増え、「葛もちを作ってみよう」「EM菌を調べよう」「～してみよう」という主体的意見が増えた。

行ったことは、昔から行ってきた地域貢献（例：花の種子配布や花壇整備・公開講座）と形式として同じであったかもしれない。また地域の活動に乗っかり、参加している気になっているだけの部分もある。しかし、生徒が環境問題を身近な問題としてとらえ、将来にも踏み込めた生徒の姿や発言、またコミュニケーションを取りながら自信をもち、トップダウンからボトムアップの姿勢が見られ、教育的効果は大きかった。

(2) 地域の環境保全活動についての効果

環境フェアの催しについても今年度新たに安曇野市から誘われたり、公民館行事や活動に誘われたり、キャンドルナイトなどの NPO 活動参加が定着し、生徒の学習発表会に公民館や市から参加していただいたりと、学校での環境学習が地域に知られ、一緒に活動していこうという素地ができた。

(3) 課題

地域での活動をしていく場合、放課後や土日・祭日の活動がどうしても必要であり、今年度は保護者の理解と協力や私学の特性（教育課程上の取り扱いなど）に支えられて行ってきた。保護者を巻き込んだり、授業での縛りがなくても自主的に活動を展開していける素地作りが必要だと感じる。

また、まだまだ地域の催しに参加することが「地域参加」と思いがちで、本質的な地域参加とはなにかを考えながら、学校教育の立場での地域との連携の在り方を、学校内でも連携し、学校同士の連携・地域活動との連携など「〇〇に参加した」という活動形態から踏み込んで、ネットワークを作ることも学校での環境学習の重要な柱になると考えられる。

(4) 今後に向けて**① 校内での連携から図る方向性**

環境学習は、地域参加によって発見が多く教育効果も大きい。ただし一つの教科や一部の生徒、職員で取り組む分野ではなく、学校全体で連携・協力があることが基盤である。

今回2月に社会科・理科・環境科学科がコラボして<ケータイ>という身近なものを通して、それぞれの教科担当が授業を行い、<ケータイ>から見える環境問題（広義の環境）が生徒に浸透した。今後も身近な題材に関して教科が協力することで、地域の連携がより充実していくと考えられる。

② 公民館との交流・地域の小中学校との協力しながらのネットワークづくり

学校が核となって環境学習を波及させていく立場をとることも大切であり、行政や公民館、他の学校などとの協力体制を作ることが「地域との連携」の柱になるのではないかと。